九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

プルーストと「パランプセスト」

中野, 知律
一橋大学大学院社会学研究科 : 教授

https://doi.org/10.15017/2556274

出版情報：Stella. 38, pp.73-92, 2019-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

プルーストと「パランプセスト」*)

中　野　知　律

1919年7月初めのシドニー・シフ夫人宛の手紙で，プルーストは，初版が刊行されたばかりの『花咲く乙女たちの蔭に』（1918年11月30日刷了，翌年6月発売）の「とても豪華な版」を新たに作る計画について語っている――

> 一冊一冊に私の原稿（manuscrit）――ファクシミリ版（facsimilé）ではなく，私の原稿のオリジナル（manuscrit original）――の数ページと，ジャック〔＝エミール〕・ブランシュによる私の肖像画の写真版を1枚挿入したものになるでしょう。ただ，ずいぶん高価なものになりそうです（たぶん一部500フラン）。というのも，全体を組み直し，原稿を傷めないよう，判を大きくしなくてはならないからです。原稿は，私の恐ろしい悪筆にもかかわらず（〔ロベール・ド・〕モンテスキウはかつて言ったものでした，汚いけれど読める字を書く人がいるし，読めないけれど綺麗な字を書く人もいるが，マルセルの字は読みにくさと酷さを併せ持っている，と），原稿を絶妙に貼り付けてくれた人のおかげで，パランプセスト（palimpseste）のようです。[1)]

同じ計画は，1918年11月初旬のジャック・ド・ラクルテルに宛てた手紙でも告げられていた――「《魅力》的な目玉として（そう思ってくれそうな人がいるのです！），私が修正を施した校正刷（épreuves corrigées）の紙片（〔新フランス評論」がとても美しく組み付けしてくれたので，パランプセスト（palimpsestes）のようでした）を付けた豪華本を作ってもらえないかと考えています」[2)] この希望を作家はガストン・ガリマールにも伝えたようで，「私の修正校（épreuves corrigées）を20ページほど」と「ジャック〔＝エミール〕・ブランシュの署名入りの私の肖像画の写真版もしくはオリジナルのデッサン」を付けた『花咲く乙女たちの蔭に』の豪華版を「300フラン」の限定版で出せないかと相談を持ちかけている[3)]。

こうした書簡で見るかぎり，プルーストが «palimpseste» という語を，自筆修正を入れた原稿（手稿であれ校正刷であれ）という緩やかな意味で使ってい

ることが確認できるのであるが，興味深いのは，修正に修正を重ねていく自らの執筆方法の特徴に対する自覚がみられる一方で，その痕跡を手元に残すことへの執着が感じられないことだろう。使い終えた自筆原稿に期待するのは「金銭的な利益」のみである，と作家は繰り返し強調していたのだ[4]。この点をめぐっては，シドニー・シフとの注目すべきやり取りが残されている。シフは，友人の自筆原稿を切り貼りした豪華本の計画が本当に実行されたのを知ると，驚きとともに遺憾の意を隠さなかったのである――

> 私は，愛書家向けの版を好む者ではありませんし，そうした版は芸術的にみて正当化しえないと思っています。私が嫌なのは，愛する作家が，というのも私たちはあなたを愛しているからですが，人格としての個性や内なる特性を商業的に活用することなのです。情熱を込めて愛している書物は，私にとって，何かしら聖なるものを持っていますし，オリジナルの紙葉，稀に見る敬愛すべき人の精神と手とを接触させる手段であった紙葉を，流行りの玩具や商売の材料にしてしまう冒瀆のように思えます。[5]

これに対してプルーストは，「豪華本の商売への批判」は「著者を餓死させる」ものだと憤慨してみせながら，次のように言い添える――

> とはいえ，私もあなたと完全に同じ意見で，豪華本にも自筆原稿（autographes）にもまったく興味はありません。もっとも，あなたと同じ理由からではないのです。そうしたものはあなたにとって何かしら聖なるものを持っているように思われるのですね（そのお考えはとても美しいものですし，みごとに表現されています）。ですが，そうであるとしても，それはある著者の書物を愛する人にとってなのであって，著者自身にとってではないのです，著者はそうしたものを見ることはないのですから。〔…〕申し上げたいのは，私は自分の知的な作業を私自身の内で行う，ということなのです。[6]

長年の執筆の証（あかし），しかも作家の個性とも言える書き直しの集積が生み出した物が，書物愛好家にとっての価値（金額）になることをはっきりと受け入れる一方で，文学愛好家＝読者がそれを「聖なるものと」して偶像崇拝し，原稿そのものに何らかの文学的な価値を見ようとすることへの警戒を表明した文章である。エクリチュールの生成過程は作者にとって「知的な作業」の場としてしか意味を持たず，それが完遂した後に残されるものへの執着は無用であって，刊行済みの原稿の散逸が文学的な「冒瀆」にあたるとはプルーストは考えていないのだ（それを文学研究上の不幸として後世が嘆くことになるとしても[7]）。

原稿に対する作家のこのこだわりのなさが，原稿のありようを喩えた「パランプセスト」への関心とともに語られていることに，ここで目を留めてみよう。プルーストが自らのエクリチュールの比喩として書簡の中で肯定的に用いている「パランプセスト」という語は，『失われた時を求めて』においてはどのような現れかたをしているのだろうか。こう問うてみたくなるのも，この語を以ってプルースト小説を読み解く鍵とした批評家の見解が浸透するなか，実際にプルーストが小説の中でこの語に与えている意味の射程は十分に検討されてこなかったからである。本稿はこの素朴な問いから出発することにしたい。

「パランプセスト」的なプルーストとは

「パランプセスト」という語がプルーストの小説美学を表わすものと見なされるようになったのは，周知の通りジェラール・ジュネットの『フィギュール』（1966 年）所収の論考「プルースト パランプセスト」[8] に拠るところが大きい。ジェネットはこの語の本来の意味――「中世の写字生が，古代作家のテクストを掻き消して，その上に新たな文字テクストを書きつけた羊皮紙」――を転用しながら，「時によって変貌させられた人や物や場所の姿が堆積して混乱したイメージを作り出し，その輪郭が跨り合ってしばしば解読不能な，そしてほとんど常に曖昧なパランプセストをなしている」プルースト世界のヴィジョンの特徴を指摘したのだった。

後にジュネットはこの語の比喩的意味，すなわち「新しいテクストの下に古いテクストを透かし読むことができること」，「テクストが他のテクストを隠しているが，それを完全に隠しおおせることなく，テクストが二重の読み，先行する作品とそこから派生する作品とが重層化する読みに供せられることを示している状態」を「イペルテクスト性」と呼び，「文学性の普遍的な相」と見なすことになる。テクストの奥に透かし読めるテクスト，重層化されたレクチュールの営みが繰り広げられる場としての批評述語「パランプセスト」に文学の本質的なありようを託して，ジュネットは自らの「詩学」を展開していったのだ[9]。

20 世紀批評の重たい期待を背負ったこの « palimpseste » という語は，しかしながら，プルーストの小説（印刷稿）について言えば 2 回だけ［*RTP*, I, 131 ; II, 408］，しかも「非常に慎ましいかたち」でしか現れていないことは，ジュネットも認めるところであった。「きわめてプルースト的な価値を持つ」パラン

プセスト概念を，批評家はプルーストのテクストにおいてではなく，ボードレールの言葉に見出さねばならなかったほどである。トマス・ド・クインシー『深淵からの嘆息』を翻案・注釈した『人工天国』（1860 年）の中の一節である――

> 《人間の脳とは，巨大で自然のパランプセストでなくて何であろう？ 私の脳はひとつのパランプセストであり，あなた方の脳もそうなのだ，読者よ。観念や感情の無数の層があなたの脳の上に次々と，光と同じく穏やかに降ってきて，その一つひとつが先立つ層を覆っているように思われた。だが実際には，いかなる層も滅びてはいないのだ》。〔…〕忘却はしたがって，つかの間のものでしかない。荘厳な事態，おそらくは死に臨む際，また一般には阿片によって創り出される強度の興奮の中では，記憶の巨大で複雑なパランプセストの全体が一挙に繰り広げられるのである。我々が忘却と呼ぶものの中で死んだままになっているかつての感情，防腐剤の芳香を神秘的に漂わせている感情の重なり合った層のすべてを伴って。[10)]

「パランプセスト」の重ね合わせと透かし読みのメカニスムは，記憶に関わるものであれテクスト相互のものであれ，『失われた時を求めて』に現れているこの語の用例ふたつのうちの一方にしか当てはまらない。ドンシエールの宿営地にサン＝ルーを訪ねた晩，仲間の将校から，彼らが受けている「戦史の講義」は「真の美学的な美の論証」になっていると聞かされる場面の表現がそうである――

> 戦さの語り手の物語であなたがお読みになることすべては，どんな小さな事実でも，どんな小さな出来事でも，引き出されるべき思想の徴にほかならず，しばしば他の思想を覆い隠しているものだ，ということですよ，まるでパランプセスト（palimpseste）におけるようにね。［*RTP*, II, 408］

もうひとつの例は，現代批評の関心にはおよそ結びつかないものである。ルグランダンがスノビスムから，ノルマンディー貴族に嫁いだ妹を語り手の家族に何とか紹介しないで済ませようと口にする苦し紛れの言い訳を「パランプセスト」に喩えた一節である――

> 偽のパランプセストを作成するのに労力と学識を費やしたあの詐欺師は，その百分の一の労苦ではるかに儲けの良い地位を手にできたであろうに，その詐欺師と同様，ルグランダン氏は，もし私たちがもっと執拗に迫っていたら，バルベックから 2 キロのところに自身の妹が住んでいることを告白するよりもむしろ，バス＝ノルマンディー

の風景倫理学と天空地理学をそっくり構築するに至ったかもしれない。[*RTP*, I, 131]

プレイアッド版註釈者も指摘する通り，プルーストがここで考えているのは，歴史上のみならず伝説上の著名人の自筆原稿および書簡を大量に偽造，販売した「詐欺師」ドニ・ヴラン＝リュカのことであろう。この男から 27,000 点にものぼる古文書を買い込んでいた学士院会員の数学者ミシェル・シャールが，1867 年，自らのコレクションのうちにパスカルが若き日のニュートンに宛てた手紙を見つけ，万有引力の法則をニュートン以前にパスカルが発見していた証拠として科学アカデミーに提出したことで，その真正さをめぐり英仏海峡を挟んでの国家の威信をかけた大きな議論に発展，2 年後にはヴラン＝リュカが贋作者として逮捕された，という事件である。歴史家と帝国図書館マニュスクリ部門に務める古文書学者，2 人の専門家の鑑定を経て，書物愛好家の数学者に売却された手稿古文書はすべて偽造であったことが判明[11]。アカデミーの権威を揺るがしたこの贋作事件に想を得てアルフォンス・ドーデが 1888 年に上梓した小説『学士院会員』（*L'Immortel*）をプルーストは読んでいる[12]。

『失われた時を求めて』のなかに挿入されたこの事件への仄めかしは，時代の関心への目配せに過ぎないのだろうか。あるいは，この小さなレフェランスは思いがけないかたちで，「パランプセスト」にまつわる追憶がプルーストの小説美学に結びついていることを明かすものなのか。それが本稿の検討課題となろう。

「ヴラン＝リュカ事件」の教訓――アルフォンス・ドーデ『学士院会員』

当時の主要新聞はこぞって「ヴラン＝リュカ事件」に触れている。1869 年 9 月 21 日の「フィガロ」紙は「ウール＝エ＝ロワールの村の小学校しか出ていない被告」が「学士院を長らく鳴動させる壮大な詐欺」を働いたと報じ，9 月 24 日の「ゴーロワ」紙は「モニトゥール・ユニヴェルセル」紙の記事を踏襲しながら，「ヴラン＝リュカが『イソグラフィ』を写しなぞって修行した」という情報を付け加えている。贋作者が参考にしたとされる書『イソグラフィ』とは，19 世紀前半に 4 巻本で出された『著名人の書字複製（イソグラフィ），自筆書簡および署名の複写（ファクシミレ）コレクション』[13] を指すのだろう。9 月 27 日の「ジュルナル・デ・デバ」紙，同月 28 日の「ル・タン」紙もこの「事件」についての記事を掲載して

いる。

1870年2月17日から24日まで開かれた裁判の状況は，「古文書学士，自筆書の専門家」の肩書を持つシャラヴェイの記録で確認することができる[14]。学術研究の基盤となるのは真正な文献であること，シャルル5世とベリー公ジャンが創設した図書館，修道院や都市の収蔵庫，個人の蔵書として蓄積されてきた貴重な写本や書物や書類，書簡が幾たびもの動乱の中で散逸してきたことを知る大革命後の社会では，歴史的資料の保管とその実証的批判の重要性が認識されていることを述べた後で，シャラヴェイは，こうした時代背景のなかで起きた贋作事件の意味を探ろうとする。特に著名な署名のある文書や「忘却に沈んできた歴史的な事実」を含んでいたり「学者のほとんどから知られていない」自筆書簡は，研究上の価値ばかりでなく，唯一無二の物としての所有価値を帯びて，一般の関心を強く引くようになっていた，ということである。

実際，好奇心にかられて押し寄せた傍聴者たちの前で，14万フランを投じて築かれた贋作コレクションのリストが読み上げられると，法廷は爆笑に包まれたという。クレオパトラがシーザーに宛てて，マグダラのマリアが蘇ったラザロに宛てて紙の上に綴ったフランス語の自筆の手紙などを，どうして権威ある学者が真正のものとして喜び勇んで購入したのか？ アリストテレス宛のアレクサンダー大王の手紙，ガリアの将軍宛のアッティラの手紙，ヴェルサンジェトリクスの通行許可証，マホメットがフランス国王に宛てた手紙，ユダ，聖ペテロ，シャルルマーニュ，ジャンヌ・ダルク，フェードル，プラトンの手紙（すべてフランス語）等々，これほどの荒唐無稽さを学士院会員がまさか本気にするとは！ 贋作者の弁護人が逆手に取ったのもまさにその点だった。「こうした文書に，シャール氏がなんらかの価値を与えていたなどと認めることは不可能に思われる」と訴えたのである。結果，ヴラン＝リュカの詐欺罪に対しては2年の禁固刑と500フランの罰金を課されて，裁判は結審したのだった。

このスキャンダラスな事件の余韻がその後も長く残ったのは，辱められたのが学士院の権威ばかりではなく，科学の威信でもあったからだろう。良識ある者の目にはあまりにも明らかな偽りに対する科学者の無邪気な盲目ぶり，専門化された学術研究を称揚し一般教養を軽んじる時代の傾向が産み出したとも言える精神の不健全な狭量さの露呈に，世間は驚いたのだ。「ヴラン・リュカを覚えておられるだろうか」と1873年11月10日の「リュニヴェール・イリュスト

レ」誌は語る――「ベネディクト修道僧の博識の如き研鑽の賜物とも言える策略と偽造によって〔…〕科学アカデミーの学術的名声に一杯食わせる栄誉を得た男である」[15]。さらに10年を経てもなお「フィガロ」紙は，「万有引力の法則の発見」をめぐる「排外的な自国礼賛」が「学術界を揺るがし」，「フランス語で書かれた古代文明」に「法廷が笑いの渦に包まれた」あの「奇妙な訴訟」を回想している[16]。

では，アルフォンス・ドーデはこの事件をどのように小説に仕立てたのか。『学士院会員』では，贋作を掴まされたのは科学者ではなく「歴史家」である。そうすることで，被害者の不面目は極まることになるのだ。というのも，「アカデミー・フランセーズの終身幹事」でかつては「外務省の古文書保管人」を務めたこの歴史家が，歴史資料，つまり彼自身の研究分野の古文書の真正さを見誤ったわけだから。

小説の主人公は膨大な数の自筆書簡や未刊の手稿を蒐集する。それらは全て，ある愛書家の財産管理人を名乗る老人から購入したものだった。詐欺が発覚したのは，歴史家の妻が息子の結婚資金にするために，夫がとりわけ大事にしていた三片の「羊皮紙に書かれた古文書（parchemins）」――カール5世の3通の手紙！（プルーストの語り手の枕頭の書を思いおこそう）――を売りに出した時である。その資料に基づいて主人公は自らの歴史研究を築きあげたというのに，まさにその史資料が偽造品であったとは……。しかも，彼の研究はアカデミーに大いに評価されたものだったのだ。絶望した学士会会員（イモルテル）は自殺する。

歴史学が隆盛を極める時代に，歴史研究者を嘲弄の対象とした小説を世に送り出すということ。ドーデが戯画化しているのは，不幸な歴史家の信じやすさや文献調査の方法の疑わしさだけでなく，資料の発見を過大評価する学術界の判断の危うさでもあろう。

ただし，プルーストも読んだこのドーデの小説には «palimpseste» という語は出てこない。主人公が蒐集したのは主に16世紀と17世紀の手稿なのである。むしろこの語に反応しているもう一人の作家に，私たちとしては注目してみてもよいのではないか。ヴラン＝リュカ訴訟を法廷で見守り，1887年4月24日の「ル・タン」紙の文芸時評「文学生活」に小説『パランプセスト』[17]の書評を載せたアナトール・フランスである。この小説の著者ジルベール＝オーギュスタン・チエリは，歴史家ジャック＝ニコラ・オーギュスタン・チエリの甥で

ある（『失われた時を求めて』には『メロヴィング朝夜話』の一節が引用されている）。かつての師のこの書評にプルーストが言及した記録はないが，その日常的な読書の射程に「ル・タン」紙および「両世界評論」誌が入っていたことは確かである。

アナトール・フランスが読む『パランプセスト』

『パランプセスト』の語り手である「古文書学士（archiviste-paléographe）」は，ある古文書を国家予算で購入するようフランス政府から命を受ける。大革命期に修道院から消えたその詩篇集はカロリング書体の下に 2 世紀の貴重なテクスト（「アプレイウスの『黄金の驢馬』を凌ぐ物語）を宿すパランプセストで，最近亡くなったロシア人の大公――「虚無主義者でオカルト趣味の愛書家」――の図書室で見出されたのだという。この愛国的ミッションはしかし挫折する。大公の蔵書はすでに全部ブリティッシュ・ミュージアムに売却されていたのだ！ 閉鎖前の図書室に語り手は辛うじて忍び込み，「死者のための典礼詩篇」を記す 10 世紀の文書の下に「降霊術（nécromacie）の場面」を語った古代の物語を読み始めるのだが，そのパランプセストは「夢遊病者」によって持ち去られてしまう。その若者は，ロシア人大公の妻への恋ゆえに夫を殺害したものの，死に際の大公から「催眠術」をかけられていたのだった。死者の呪いは功を奏して，若者と大公の妻とは結ばれることなく自死を選び，その惨劇の中でパランプセストもまた行方知れずとなる。

この物語では，贋作ではなく本物の手稿が問題になっているのだが，アナトール・フランスの関心はむしろ，死者による呪縛という「神秘主義」と，パランプセストそのものの持つ「神秘的魅力」とを共鳴させた物語の展開，さらには，削られた羊皮紙に読み取れた文書が「死者の魂を呼び出し甦らせる呪文となる魔術的な定詞」を含む恋愛譚であることに向けられている。

実際，『パランプセスト』の書評は「交霊術（spiritisme）」についての見解から始まっていた。アナトール・フランスは，同時代の科学者たちが交霊術を証明しようとしていることに注目し，「驚異」が実在する証拠として「心霊写真」を研究していたイギリスの化学物理学者ウィリアム・クルックス卿の名を挙げる[18]。心霊写真–催眠現象–霊媒による降霊術 / 交霊術と，パランプセスト――現実と超現実，目に見えるものと不可視のものの二重焼きは，テクスト

の重ね合わせとアナロジーの関係にあるのではないか。そうしたものへの現代人の強い興味は，幻影や神秘の偶像崇拝に繋がっていないか。「修道士たちが石灰乳で洗った羊皮紙の上に最初のテクストを甦らせるための試薬を今世紀〔19世紀〕初頭の化学者たちが見つけ出した」ように，「科学」は今日，写真のような技術の進歩によって「超自然的な事象」を捉えようとしている。そうした動向に対して，懐疑主義者の批評家は同時代人に警告を与えるのである――

> 迷信が宗教的なものに限られると信じるのは大きな誤りである。迷信が非宗教的になる時代もあるのだ。もし科学のみが君臨する日が来れば，信じやすい人は科学的な妄信しか持たなくなるだろう。

「驚異を好む傾向」は「すべての人間が生来持っているものである」ことを認めながらも，アナトール・フランスは，非現実的なものを喚起するのは，「超自然科学」ではなく「詩人たち」に任せるべきであると言明する。詩人たち，この「すばらしき嘘つき」こそは「その芸術の魔法によって」，その覚醒した精神によって，フィクションの中で驚異を信じさせることができるのだから――

> 正しくは，未知の世界への道を，魔術師や交霊術者に委ねるのではなく，小説家や詩人に求めるべきなのだ。小説家や詩人たちだけが，魔法にかかった磁極に向きをとる磁針を手にしており，夢想の宮殿の黄金の鍵を握っているのである。私たちにはどのみち魔術や降霊術が必要なのだから，神秘へのイニシエーションを求めるなら，新たなアプレイウス，ホフマンやエドガー・ポーに頼もう。詩人たちは，少なくとも，欺くことはない。というのも，詩人が嘘をついていること，無私無欲によってのみ嘘を語っていることを私たちは知っているからである。

ここでひとまず「パランプセスト」という語の磁場に引き寄せられたモチーフを整理しておこう。「科学的＝学術的な信じやすさ」，実証を重んじる学者たちの危険な無教養ぶり，専門家の狭量な精神（ヴラン＝リュカ事件），歴史家–古文書学者および歴史資料文献考証のカリカチュア（アルフォンス・ドーデの小説），交霊術の幻影と文学的虚構との対置（アナトール・フランスの書評）。そのいずれもがプルーストの先達および同世代の知的関心を呼んでいたものであることをまずは認めておきたい。

興味深いことに，プルースト小説の中には，これらのモチーフが揃って現れている場面があるのだ。『ゲルマントの方』のヴィルパリジ夫人のマチネであ

る。「パランプセスト」の影を忍ばせたそのサロン情景を以下で考察してみよう。

ヴィルパリジ侯爵夫人のサロン――「歴史」のアトリエ

プルーストは語り手が最初に体験する社交界の舞台に「歴史家」と「古文書学者」を登場させている。小説内でこのマチネにしか登場しない二人は，社交的な会話に上手く交われず，文学教養の欠如を露呈してヘマを重ねるばかりの端役と見なされ[19]，研究者の分析は専ら主要登場人物であるゲルマント一族（公爵夫妻，サン＝ルー，シャルリュス），ノルポワ，ルグランダン，ブロックに向けられてきた。しかしながら，歴史家と古文書学者の姿には，社会科学に対する当時の目線が映り込んでいるだけでなく，ヴィルパリジ夫人のサロンでこそ意味を持つ役割が当てられているように思われる――

> 私が到着したときサロンに集っていた人々のなかには，まず古文書学者がいて，ヴィルパリジ夫人と朝から一緒に，歴史的な人物が夫人に宛てた自筆書簡を分類整理していたが，そうした手紙は夫人が執筆中の回想録に証拠資料としてファクシミリのかたちで付されることになっていたものである。それから，尊大で内気な歴史家が，モンモランシー公爵夫人の肖像画を侯爵夫人が相続していることを知って，フロンドの乱についての自著の図版に掲載する許可をもらおうとやって来ていた。この２人の訪問客に加わったのが，私の旧友ブロックであった。［*RTP*, II, 487］

古文書学者，歴史家，そしてブロック――このトリオを心に留めておこう。三人はそれぞれのやり方で侯爵夫人の「回想録」に関与する存在である。古文書学者は「侯爵夫人の秘書として」［*RTP*, II, 490］夫人が所有する「歴史的な」「自筆書簡」の真性さを保証し，歴史家は肖像画の由来を精査しながら，回想録者の想起に弾みをつける。彼らの助けによって，侯爵夫人の物語（histoire）は「後世」にとっての歴史（Histoire）となるわけだが，そうした予見される後世の「代表」［*RTP*, II, 491］を体現している存在がブロックなのである。

奇妙にも，ブロックはまるで「交霊術の力が出現させた人間」のようにその場に姿をあらわす。「サロンにユダヤ人が入ってくるというスペクタクルに立ち会うときには〔…〕その姿は命を吹き込まれていっそう奇異なものに映り，あたかも霊媒のはたらきで呼び出されたかのように感じられる」。「もしヴィルパリジ夫人のサロンの照明の中でブロックの写真を撮ったとしたら，そのネガはイスラエルの民について〔…〕心霊写真が示すのと同じイメージを与えてくれ

るのではないかと，私には思われるのであった」，そう語り手は言う［*RTP*, II, 488-489］。まさにここで私たちは，アナトール・フランスによる『パランプセスト』の書評の文脈にいるではないか！「ダレイオスの宮殿扉口」，「スーサの記念建造物の帯状装飾（フリーズ）に描かれたアッシリアの書記」に似たブロックは，「パピルスの巻物のごとく手袋を手にしている」［*RTP*, II, 477-488］。実のところ，グラッセ版校正刷ではブロックが喩えられていたのは，スーサの「射手」だった。それが「書記」に修正され，そのアトリビュートとしての「パピルス」が加筆されたことによって[20]，この場面の奥に「パランプセスト」をめぐる書評のコンテクストが見え透けてくるのである。

ニーチェによる「パランプセスト」

「ブロックは，かつての貴族生活の特徴を目撃者の証言から教わる滅多にない機会を利用したいと思って」やって来ていたのだが，過去どころか現在の礼儀作法にも無知な彼は，社交上の慣習と個人的な習慣を混同してしまう。「モレ氏が自宅で，シルクハットを手に持って晩餐に降りてくる姿」を思い出す侯爵夫人に，ブロックは答える――「ああ，それはまた随分たちの悪い教養俗物の（pernicieusement philistin）時代を思い起こさせますね！」［*RTP*, II, 490］[21]。ここでのコミックは，「教養俗物＝ペリシテ人（philistin）」という言葉をユダヤ人ブロックが使っていることにとどまらない（言うまでもなく，聖書においてペリシテ人はイスラエルの敵であり，ヘブライ人の歴史的ライバルである）。その比喩的な語義としての「教養俗物」すなわち，芸術や文学など精神的な営みを解さない卑俗な人間が，ブロックという底の浅い教養人，流行を追うだけの文人によって批判されるところにもある。さらにはここに，ニーチェの用語としての「教養俗物」の弥を聴きとることもできようか。1907 年にメルキュール・ド・フランス社からフランス語訳が出た『反時代的考察』の一節を思い起こそう――

> どのような類の人間がドイツでは力を握るに至ったか。教養俗物（philistins cultivés）だと言ってよかろう。«philistin» という語は，周知の通り，学生言葉から借りたものである。それは，俗な用語ながら広く受け入れられている意味で，ミューズの息子（詩人），芸術家，教養の高い人の反対を指す。[22]

同じ論文集の他の論考には，「パランプセスト」の比喩も見出せる。「人生にとっての歴史研究の有用性と難点」（1874 年）の章でニーチェは，「歴史学によって時代が過飽和状態になっていること」の危険性を指摘し，「骨董屋的歴史家」の「保存と崇拝の精神」を批判している[23] ――

> 骨董屋的人間は，曇って雑然とした幾世紀もを越えて，自らの民族の精神に，まるでそれが自らの精神であるかのように，しばしば挨拶する。物を通して感じ予感すること，ほとんど消えかけた痕跡を辿ること，本能的に過去をしっかり読みとること，文字が他の文字にどれほど覆われていようとも，パランプセスト（palimpseste）〔書き直された羊皮紙〕，ポリプセスト（polypseste）〔何度も書き直された羊皮紙〕を理解することそれが彼の天分であり取り柄なのである。[24]

こうした偏執的な歴史家は人生において本質的なことを何も理解することがない，とニーチェは言う，「その羊皮紙的な顔（visage parcheminé）が見せる奸策のあらゆる皺，錯綜しているものを解きほぐすその指の名人芸的な巧みさにもかかわらず」[25] と。その顔はまさしく，自らのスノビズムを隠すための奸策を練るルグランダンの渋面を思い起こさせるものではなかろうか。1880 年代にニーチェの著作がフランスに紹介されるにあたって，プルーストの友人ダニエル・アレヴィやロベール・ドレフュスの功績が大きかったことを思えば[26]，ルグランダンの挿話にニーチェの一節の影を見ることもあながち無理ではあるまい。

さて，これまでの考察から何が見えてくるだろう。ヴラン＝リュカ事件，アルフォンス・ドーデの小説，アナトール・フランスによる書評，ニーチェのテクストは，いずれもヴィリパリジ夫人のマチネの可能なレフェランスに過ぎない。しかもそのうち，作家自身が言及している参照関係はひとつだけ，ドーデの『学士院』を読んだことである。プルーストにおける受容の問題を考えるうえでの難点がそこにある。限られた明示的レフェランスに拠ってのみ考察することの不毛さと，テクスト相互関連性を想像力によって限りなく押し広げたところに見えてくる危うい豊饒さ，そのせめぎ合いに研究者は翻弄されてしまうのだ。

この難点への向き合い方を試すために，「パランプセスト」をめぐって作家が知り得たであろうモチーフの透かし見える小説テクスト，ヴィルパリジ夫人の

マチネに，プルーストの美学がどのように投影されているのかをさらに検討してみよう。「回想録」の歴史的 / 文学的価値を問う語り手の考察に，プルーストによるサント＝ブーヴ批判およびゴンクール批判の問題系に繋がっていく可能性を垣間見る，というパランプセスト的レクチュールの実験である。

回想録を書くこと / 読むこと――作者と読者の共謀

サロンの訪問客の反応を見ながら，「ヴィルパリジ夫人は，平均的な公衆，すなわち，やがて自身の読者が募られることになるであろう公衆を代表する人々に対して，回想録のメカニスムと魔力（sortilège）がどのように働きかけるのかを，自らも気づかぬうちに試していた」［*RTP*, II, 491］。侯爵夫人の現在のサロンを構成していたのは，まさにそうした「三流の公衆，ブルジョワ，田舎貴族あるいは没落貴族」［*RTP*, II, 481］であって，彼らは伝統ある「エレガントな社交界」［*RTP*, II, 486］の何たるかを知らない面々だったのである。

人が読みたいと思うことを回想録に書くすべを侯爵夫人は知っている。読者は，「《歴史（Histoire）》の前景に」身を置いているかのような，そしてその時代の最も輝かしい社交界に参加しているかのような「幻影」を味わいたいのだ。自分たちが生きることはなかった過去の崇拝，その時代に生きていたとしても実際には自分たちが排除されていたはずの社交界への憧れ。読者のスノビスムを掻き立てるこの偶像崇拝めいた二重の渇望に，回想録作家のスノビスムが応えようとする。まず，ヴィルパリジ夫人の「歴史的な色合いに対する思慮深い本能」によって整えられたサロンの舞台装置の効果で[27]，その情景の読み手は「生を歴史に結びつけ」，「歴史をいっそう生き生きとしたものとし，人生をほとんど歴史的なものに変える」ことができる[28]。さらに侯爵夫人は，自らのサロンがとうに失っている社交の「エレガンス」を作り出すために，「高貴な生まれ，王家やほぼ王家に匹敵する出自の」人間，「後世」が「羨望する階層」との「親密さ」を会話や思い出の端々にうかがわせる［*RTP*, II, 49］。現実のサロンの凡庸さと，演出された歴史性およびエレガンスとのあまりにも凝った二重焼き＝重ね合わせは，実にパランプセスト的なヴィジョンを成している。

同じヴィジョンは，1907 年春に「読書の日々」のタイトルでプルーストが「フィガロ」紙に発表した『ボワーニュ伯爵夫人の回想録』の書評[29] ――著者自身によれば「《スノビスムと後世》と題されるべきもの」――にもすでに見出

される。小説のヴィルパリジ夫人のマチネではさらに，回想録の装われたヴィジョンがどのように「後世に伝わるのか」[*RTP*, II, 492]，その擬装のメカニスムが解説されているわけだ――

> 回想録に描かれたサロンの性格の微妙なニュアンスは，後の読者には感じ取りにくいものである。回想録においては，著者が持っていた凡庸な人間関係が消えてしまっていて，というのも引用される機会がないからだが，その一方で，実際にはその場にいなかった輝かしい訪問客への言及は欠けていないので，というのも回想録に書き込めるスペースはきわめて限られているから，そこを占めているほんの僅かな人間が王侯貴族や歴史上の人物であったりすると，回想録が公衆に与えるエレガンスの印象は最大級のものに達するのである。[*RTP*, II, 491-492]

作者と読者の間で分かち持たれるこの優美な幻影は，ヴィルパリジ夫人による回想録の特徴というよりもむしろ，回想録というジャンルそのもの本質ではあるまいか。それを読む人々の嗜好や判断を先取りしつつ書くことは，倒錯的な奸策にほかならない。同様の暗黙の共犯関係を拒むどころか利用することに甘んじたサント＝ブーヴ批評のあり方をプルーストは糾弾したのであった――

> 冬の朝の薄明の中でサント＝ブーヴの目に浮かぶのは，高い柱に囲まれた寝台でボワーニュ夫人が「コンスティテュショネル」紙を広げる姿だった。〔…〕そんな風にして彼の評論は，一種のアーチを描くかのように，その始点は自身の思考と文章の中にあるのだが，終点は読者の精神と賛嘆の中に延びている虹みたいに，読者の考えのなかでその曲線を完成させ，最終的な色彩を受け取るのだ，と彼は思っていた。〔…〕したがって，ジャーナリスティックな美とは，そのすべてが論考のなかにあるわけではない。その美が完成する読者たちの精神から引き離されると，壊れたヴィーナス像でしかなくなるのだ。〔…〕想像される然々の読者の声なき賛同に照らして，ジャーナリストは自らの言葉の重みを計り，言葉と思考とのバランスを見つけるのである。ゆえに，他者との無意識の協同作業によって書かれたその作品は，その分，作者独自のものではなくなっている。[30)]

> そうした美しさの一部は――この文学ジャンルの本質的な欠陥であり，あの有名な『月曜閑談』も例外ではなかったが――それが読者のうちに産み出す印象の中に宿るのだ。[31)]

不完全な文学。著者の創造的探求が完遂されることなく，レクチュールによって常に補われねばならないエクリチュールのありかた。ジャーナリスト批評家

サント＝ブーヴを「劣った作家」[*CSB*, 218] と呼んだのと同じ意味において，後世の期待に寄りかかろうとする回想録作家をプルーストは「二流作家」[*RTP*, II, 482] と断じるのである。

記憶 (mémoire) / 回想録 (Mémoires) ――文学の境界

ヴィルパリジ夫人のマチネの先行テクストのひとつである『ボワーニュ伯爵夫人の回想録』書評のなかでは，過去を保存することついての詩人–哲学者の考え方と歴史家–考古学者–古文書学者の見解とが対峙されている――

> 詩人と哲学者が長らく我々に語ってきたのは，〔…〕我々の生が巨大な忘却に確実に向かっているということであり，忘却は，人の記憶の中で長らえることが最も確約されているように思われていたものさえも，何年かのうちには食らい尽くし消滅させるということである。ところが，考古学者や古文書学者は逆に我々に示すのだ，何ものも忘れ去られることはなく，何も破壊されることはなく，人生のどんなに慎ましい状況さえも〔…〕その痕跡を，過去の巨大な目録の中に残していくのであり，人類はそこで自らの生の刻一刻を語るのだ，と。そして，クレタ島やエジプトやアッシリアの野にあっては，〔…〕テーセウスやアメンホテプやサルゴンの人生のどんなにつまらぬ細部，どんなに虚しい楽しみさえも，「歴史（Histoire）」が考慮してくれるのを待たないものなどないのであって，それが当代の学者たちの最も重厚な研究のマチエールとなっている，と言うのである。[32)]

私たちの記憶から消えてしまった生は，回想録の中で「生き延びる」[*CSB*, 926] ことができるのだろうか――歴史資料として提供される回想録の中で。あるいはむしろ，過ぎ去った瞬間が埋葬されている忘却から，我々の人生は立ち上がり，甦ることになるのだろうか――ボードレール的な「記憶のパランプセスト」[33)] が突然，「重なり合った層のすべてを伴って繰り広げられる」ように，そして「我々の奥底で錨を上げた」「回想」が「通過する距離のざわめき」のなかで「ゆっくりと浮かび上がってくる」[*RTP*, I, 45-46] ように。このふたつの問いに対して『失われた時を求めて』が最終的に出す答えは明らかであろう。

詩的 / 歴史的な視点のコントラストは，アナトール・フランスが提示した詩人–小説家 / 科学者の対置の延長上にあると言えようが，プルーストはそこからさらに独自の問題を引き出しているように思われる――回想録の文学的 / 資料的価値の問題である。

ヴィルパリジ邸のマチネの読者は，侯爵夫人が執筆中の回想録の舞台裏に誘われる。「古文書学者とともに夫人が行う回想録の裏付けとなる文献資料調査」についての言及があるからだ［*RTP*, II, 491］。資料を分類し，選別し，整える作業への専門家の介入を経た回想録はもはや出来事の貯蔵庫ではない。また，スノビスムのフィルターを通った回想録者の「思い出」は「往々にして修正されている」［*RTP*, II, 492］。回想録の中に保存された過去は，価値判断を帯びた資料性と虚構性とに覆われている。たとえ「人生と現実の立体感という見かけ」［*CSB*, 532］を与えようとも，回想録とは再構成された人生，意図をもって整えられた過去，語られた生にほかならない。そのことにプルーストは，1907年の書評を準備する段階から気づいていたのではなかったか――「ボワーニュ伯爵夫人の回想録，奇しくも《ある小母の物語 Récit d'une tante》と題された回想録」と原稿に記しながら（「フィガロ」氏は手稿のこの部分を活字にしなかったけれども）[34]。

回想録の資料性／文学性を論じながら，プルーストは，「資料的小説」すなわち，1891年に「ゴーロワ」紙のアンケートに答えてエドモン・ド・ゴンクールが提唱した小説のあるべきかたちについても思いを馳せたろうか。レアリスム–自然主義の黄昏時にあってなお，流派を率いてきた巨匠は，来るべき文学における虚構性の放棄にこだわっていたのだった――

> 求められているのは資料（ドキュメント）である。誠実さの標（しるし），証拠資料，〔…〕真実性と精確さの生気によって，人は心動かされたいと願うものなのだ。〔…〕私が思うに，書物の最も完全な形とは，日記であり，回想録である。[35]

私たちの「か弱い記憶」［*CSB*, 530］が過去を描き出すために公然と虚構を求めるのに対し，回想録は「軽やかな優美さ」［*RTP*, II, 483］以外のものを漉し取った歴史的資料として，見出された時を装う。小説的真実か，資料的虚偽か。プルーストに迷いはあるまい。

結　語

ジュネットの引用を逃れているボードレールの『人工天国』の一節を思い起こしながら本稿を終えよう――「我々の底知れぬ記憶においては，気質による宿命が，必然的に，極めてちぐはぐな諸要素の間にひとつの調和をもたらす」[36]。

「パランプセスト」という語をめぐって先立つ世代および同世代の作家たちが取り上げた主題やモチーフやがいかに不統一に見えようとも，ひとたび私たちの小説家によって受容されると，そのすべてが繋がり重なり合って，『失われた時を求めて』の堅牢な美学を支えるものとなっていくように思われるのである。

註

＊）本稿は，2019年9月28日・29日に大阪大学に於いて和田章男教授によって開催された国際シンポジウム «Proust et l'esthétique de la réception» での発表原稿に加筆修正を施したものである。以下，本文および註で引用・参照に使用するプルースト作品の版は以下のとおり（いずれにおいても出典は［ ］内に略号とともに巻数と頁数を記す）—— Marcel PROUST, *À la recherche du temps perdu*, édition publiée sous la direction de Jean-Yves TADIÉ, 4 vol., Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1987-1989, 1994［abrégé ensuite : *RTP*］; Marcel PROUST, *Contre Sainte-Beuve*, précédé de *Pastiches et Mélanges* et suivi de *Essais et articles*, édition établie par Pierre CLARAC et Yves SANDRE, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1971［abrégé ensuite : *CSB*］; *Correspondance de Marcel Proust*, éditée et annotée par Philippe KOLB, 21 vol., Paris : Plon, 1970-1993［abrégée ensuite : *Corr.*］.

1）Lettre à Mme Sidney Schiff［du 2 juillet 1919］, *Corr.* XVIII, 295.

2）Lettre à Jacques de Lacretelle［de peu avant le 7 novembre 1918］, *Corr.* XVII, 439-440.

3）Lettre à Gaston Gallimard［du 7 novembre 1918］, *Corr.* XVII, 443-444.

4）*Corr.* XVII, 443 : «intérêt pécunaire» ; *ibid.*, 439 : «au point de lucre».

5）Lettre de Sideney Schiff à Marcel Proust, du 30 août 2020, *Corr.* XIX, 423.

6）Lettre à Sidney Schiff［du 1er ou du 2 septembre 1920］, *Corr.* XIX, 435. 1920年春刊行の豪華版に切り貼りされた原稿については以下の研究を参照—— Francine GOUJON, «Le Manuscrit d'*À l'ombre des jeunes filles en fleurs* : le "Cahier violet"», *Bulletin Marcel Proust*, n° 49, 1999, pp. 7-16 ; Pyra WISE, «L'édition de luxe et le manuscrit dispersé d'*À l'ombre des jeunes filles en fleurs*», *Bulletin d'informations proustiennes*, n° 33, 2003, pp. 75-98 ; «Le généticien en mosaïste. La reconstitution du manuscrit d'*À l'ombre des jeunes filles en fleurs*», *Genesis*, n° 36, Paris : Presses de l'Université Paris-Sorbonne, 2013, pp. 141-150.

7）Jean-Yves TADIÉ, *Marcel Proust, biographie*, Paris : Gallimard, 1996, p. 807.

8）Gérard GENETTE, *Figures*, Paris : Éd. du Seuil, coll. «Tel Quel», (1966), repris dans la coll. «Points» sous le titre de *Figures I*, le même éditeur, 1976, pp. 39-67.

9）Gérard GENETTE, *Palimpsestes. La littérature au second degré*, Paris : Éd. du Seuil, coll. « Poétique », 1982.

10）Charles BAUDELAIRE, « Un mangeur d'opium. VIII. Visions d'Oxford. Le Palimpseste », *Les Paradis artificiels*, 1860, traduction et commentaire de *Suspiria de Profundis* de Thomas DE QUINCEY. *Œuvres complètes* de Baudelaire, t. I, Paris : Gallimard : « Bibliothèque de la Pléiade », 1976, pp. 505-507. Le passage est cité par Gérard GENETTE, *Figures I, op. cit.*, p. 67.

11）Henri-Léonard BORDIER et Émile MABILLE, *Une Fabrique de faux autographes ou récit de l'Affaire Vrain Lucas*, Paris : Libr. Léon Techner, 1870. Voir aussi « Spécimen des faux autographes fabriqué par Vrain-Lucas, et vendus à Michel Chasles, offert avec la permission de l'autorité judiciaire au Cabinet des Manuscrits de la Bibliothèque Nationale par les experts Henri Bordier et Émile Mabille ».

12）*Corr.* XIV, 148 et XVII, 191-192.

13）*Isographie des hommes célèbres ou Collection de facsimilé de lettres autographes et de signature*, 4 vol. (t. I-II en 1828-1830 ; t. III-IV en 1843) ; 666 fac-sim. Auteur : Trémisot (receveur de la Ville de Paris). Éditeurs : A. Mesnier (Paris), Truttel et Wurtz (Paris), Charavay (Paris). Contributeurs - éditeurs scientifiques : Étienne Charavay (1848-1899), Hyppolytte de Châteaugiron (1774-1848), Jean Duschesne (1779-1855), Auguste Simon Louis Bérard (1783-1859). Contributeur – lithographe : Théophile Delarue.

14）Étienne CHARAVAY (archiviste paléographe, expert en autographes), *Faux autographes : Affaire Vrain-Lucas. Étude critique sur la collection vendue à M. Michel Chasles et observations sur les moyens de reconnaître les faux autographes*, Paris : Librairie Jacques Charavay aîné, E. Dentu, libraire-éditeur et Alphonse Lemerre, éditeur, 1870.

15）*L'Univers illustré*, 1er mars 1873.

16）*Le Figaro*, 10 novembre 1883.

17）Gilbert AUGUSTIN-THIERRY, « Le Palimpseste », *Revue des Deux Mondes* du 15 mars 1887, publié sous le titre : *Malfa, le Palimpseste*, Paris : Perrin, 1887 ; Anatole FRANCE, « Le Merveilleux. - L'hypnotisme dans la littérature : *Malfa, le Palimpseste*, par Gilbert-Augustin THIERRY [*sic*] », *Le Temps* du 24 avril 1887, p. 2 (chronique « La Vie littéraire »), repris dans *La Vie littéraire*, Paris : Calmann-Lévy, 1921.

18）Sir William CROOKES, *Researches in the Phenomena of Spiritualisme*, London : J. Burns, 1874 (*Recherces sur les phénomènes du spiritualisme*, traduit de l'anglais par J. ALIDEL, Paris : Librairie des sciences psychologiques, 1878). クルックスとアナトール・フランスの関係および写真の証拠能力をめぐる後者の立場については

次の緻密な論考を参照――澁谷与文「アナトール・フランスと写真」, *Héliogramme 2017*,『学習院大学人文科学研究所報』, 2018 年, 5–20 頁。

19) *RTP*, II, 490-491, 510. フロンドの乱を専門にする歴史家は, モリエールを間違って引用する（ただし, 幸いにも「恐る恐る小さな声で引用したので, 誰にも気づかれなかった」）。

20) *Épr. Grasset* ; premiers placards du *CGI*, imprimés entre les 6 et 11 juin 1914 ; II, 1617 ; NAF 16760, 42 v°-43 r° papier collé, ajout autographe.

21) ブロックの言葉を聞いていた歴史家と古文書学者は, その誤解を修正してやることができず,「侯爵夫人のほうを感動を込めて見つめ,〈何もかも, どなたをもご存知のこのお方にお尋ねになられるとよいでしょう〉と言わんばかりであった」[*RTP*, II, 490]。果たしてヴィルパリジ夫人は即座にブロックの見解を否定する。歴史を専門としながら, 狭義での学術以外の知識には疎い学者の姿をプルーストはしっかりと捉えている。

22) Frédéric Nietzsche, « David Strauss. Sectateur et écrivain » (1873), *Considérations inactuelles*, t. I, traduction en français par Henri Albert, Paris : Mercure de France, 1907, p. 16.

23) Nietzsche, « De l'utilité et des inconvénients des études historiques pour la vie », (1874), *op. cit.*, pp. 148-149, 170.

24) *Ibid.*, pp. 149-150.

25) *Ibid.*, p. 172.

26) Laure Verbaere, « Les traductions françaises de Nietzsche — en Europe », *Études germanique*, 3e trim. 2008, n° 251, pp. 601-621.

27) Les canapés et les fauteuils sont « en tapisserie de Beauvais », fabriqués probablement à la manufacture royale fondée en 1664 par Colbert ; « coiffée d'un bonnet de dentelles noires de l'ancien temps », elle peint les fleurs qu'on connaît « dans quelque estampe du XVIIIe siècle » [*RTP*, II, 486-487].

28) *CSB*, 531-532.

29) « Journées de lecture », *Le Figaro*, 20 mars 1907 ; *CSB*, 527-533. Voir aussi son article de mondanités intitulé « Un salon historique. Le salon de S.A.I. la princesse de Mathilde », publié dans le *Figaro* en 1903.

30) NAF 16636, 26 v° ; *CSB*, 227-228.

31) *La Fugitive*, cahiers d'*Albertine disparue*, texte établi par Nathalie Mauriac Dyer, Paris : Livre de poche, 1993, p. 162 ; *Albertine disparue*, édition intégrale établie par Jean Milly, Paris : Honore Champion, 1992, p. 231.

32) Voir le « long passage » coupé par le rédacteur du *Figaro* lors de la publication et reproduit dans *CSB*, 924-929 et *RTP*, II, 1611-1614 ; NAF 16634, 80°-118r°. アンシャン・レジームのように［*CSB*, 531］, その過去がより「我々に近いもの」［*CSB*, 925］である時には, その発掘は考古学者の代わりに歴史家の仕事となる。

33) BAUDELAIRE, *op. cit.*, p. 506.

34) Voir *CSB*, 923. *Les Récits d'une tante. Mémoires de la comtesse de Boigne, née d'Osmond (1781-1866)* venait de paraître chez Émile-Paul.

35) « Le Roman romanesque : notre enquête », *Le Gaulois*, 14-25 mai 1891, au sujet de l'article de Marcel Prévost intitulé « Le Roman romanesque moderne » (*Le Figaro*, 12 mai 1891, p. 1). La réponse d'Edmond de Goncourt a paru au *Gaulois* du 16 mai 1891, pp. 1-2.

36) BAUDELAIRE, *op. cit.*, p. 506.